



GCD ジーニアス英和辞典 第4版

Question Box

『ジーニアス英和辞典 第4版』に寄せられたご質問にお答えします。



Q. not ④ [notの主節への移動] のところに、「意味の違いが生じない場合、主節を否定にするのがふつう」とあります。しかしある入試問題に *She thought that he couldn't go by bike because there was snow on the ground.* という文がありました。これは *She didn't think that he could...* にする方が適切だということにならないでしょうか。

A. 否定辞の繰上げは必ずそうしなければならないというものではありません。この問題はこのままでOKです。入試問題は当然ネイティブスピーカーによるチェックを受けていると思いますが、否定辞を繰り上げると、*She did not think that *he could go by bike because there was snow on the ground* のように *that* 節の中が非文になってしまうので、繰り上げないほうを取ったのだと思います。

ちなみに、*I think he is not honest.* だと *he is not honest* の部分が断定的に響きますが、*I don't think he is honest.* のように言うと断定口調が緩和されます。このような違いにも注意が必要です。

Q. get ⑩b [被害] で、《◆不注意による事故などで主語に責任がある場合は通例 get, 犯罪・災害などで動作主に責任がある場合は通例 have》という注の後に *We got [*had] our roof blown off in [by] the gale.* という例が載っています。風で屋根が吹き飛ばされるのは主語 *we* に責任があるのでしょうか。この説明はおかしいのでは。

A. 確かにここは説明に不備があり、ご迷惑をおかけしました。まず、*We got our roof blown off in [by] the gale.* と *We had our roof blown off in [by] the gale.* は両方可で、違いがあるとすれば *get* の方が口語的だというくらいです。×は不適切でした。また、これらの文には動作主はありませんが、動作主がない場合を説明できない書き方になっていました。

ここは次のように書き直すことにします。

b) [被害]《略式》[doneに通例強勢を置いて]〈人が〉O〈自分の物〉を…される《◆特に自己の不注意などで引き起こした事故や不幸をいう場合に好まれる。cf. have ⑩b)》|| *Be careful not to ~ [*have] yourself burned.* やけどしないように注意しなさい《◆やけどは一般に不注意で起こる事故なので get》/ *He got [had] his bag caught in the train doors as they were closing.* 電車のとびらが閉まる時に彼はかばんをはさまれた《◆自己の不注意による事故を暗示するので get が好まれるが、have も可》/ *We got [had] our roof blown off in [by] the gale.* 強風で屋根を吹き飛ばされた《◆自己の不注意による事故ではないので have がふつう》。

以上は文法にこのようなルールがあるわけではなく、あくまで傾向として言えることです。

Q. visit ⑩②には *There was no time to ~ [the zoo [there]].* という例があります。visit there の visit は自動詞ではないのでしょうか。

A. visit there を他動詞の用例にしているのは、there を名詞と見なしているからです。G4 は there に

名詞をたてていますから、整合性は取れています。here, there に名詞をたてるのは英和辞典としては普通です。

しかし、高校では *arrive at there や *go to there, *his visit at there が間違いであることを教えるのに「there は副詞だから」という言い方をさせていると思います。そこへ there には名詞もあるといったのでは arrive at there はなぜだめなのかということになって、混乱するかもしれませんね。

結論から言えば、高校現場では here, there は副詞で通す方がよいと思います。ためしに、次の質問の答えを考えてみてください。

1. (3)が文法的であるのに、(4)が非文なのはなぜか。

(1) The enemy attacked the town.

(2) The enemy attacked there.

(3) The town was attacked by the enemy.

(4) *There was attacked by the enemy.

2. 名詞 here, there を主語にした文を作れるか。

3. here, there 以外に主語になれない名詞があるか。

4. up there, down there のそれぞれの品詞は何か。

かつて1940-50年代に cannon ball の cannon の品詞は何かといった品詞論が盛んに戦わされました。cannon は名詞を修飾しているのだから形容詞だというのが機能派、cannon は名詞で「形容詞的に使われている」とするのが範疇派です。機能派に従うと、the cat lay under the bed の under the bed は前置詞句、the cat came from under the bed の under the bed は名詞句になります。範疇派に従うと、両者とも範疇は前置詞句で、一方は本来の副詞用法、他方は前置詞の目的語になっている（臨時的な）名詞用法、となります。現場では後者のほうがすっきりするでしょう。

品詞を通常8つに分類するのは、全ての語を8品詞に分類できるからではなく、学習上便利だからにすぎません。それに現在では2語以上の集まりは未分析のチャンクとしてとらえるのが普通で、読む側にこれを分析して品詞を答えよと求めることはありません。

辞書は便宜上すべての単語を品詞に分類しなければならないこともあり、『ジーニアス英和辞典』は機能派寄りの記述を here, there に採用してきましたが、here, there は本来は副詞で通すべきです。次の改訂

ではその方向で記述の整合性を図りたいと思います。当面は leave there は自動詞+副詞、from here は前置詞+名詞、と便宜的に整理して、不統一の是正も含めて小規模の修正を行なうにとどめます。

Q. time 図⑧の It's ((英) high) ~ (that) I was leaving. の注は、G4 では「節内の動詞は仮定法過去形、be 動詞は was がふつう；…」とありますが、G3 では「節内の動詞は直説法過去形が普通」となっていました。記述が変わったのはどうしてでしょうか。

A. I was weak when I was a boy. は、法 (mood) は直説法で全体の時制 (tense) は過去です。

It's time I was leaving. は、法は仮定法で全体の時制は現在です。

現代英語には仮定法を示す屈折語尾がないので、時制を一つずらして仮定法であることを示します。全体の法を問題にする場合は、前者は直説法、後者はあくまで仮定法です。ただ、いずれの場合も be の変化形 was を「直説法過去形」と言うことは可能です。

この句は『英語教育』Question Box でも何度か話題にされましたが、基本的には was, were, am などのどれが用いられるのかが論じられました。そして was=直説法過去形とされていて、文全体の法という観点は示されていませんでした。しかし辞書としては is → was と時制がずれるのはなぜかという説明がまずあるべきだと思います。全体の法はあくまで仮定法であり、そこで仮定法過去 were の変異形の was が用いられると理解してもらう方がよいと考え、上記のように変更しました。「I were でなく I was がふつうである」ことを「直説法過去形がふつう」と表現することは可能ですが、上記の説明と一緒にすると混乱を招くので避けた次第です。

なお、「be 動詞は was がふつう」はやや正確さを欠くので、「be 動詞は一人称・三人称単数主語の場合 was がふつう」と修正します。

(このコーナーは、『ジーニアス英和辞典 第4版』の編集主幹の南出康世先生の見解を元にして、辞典編集部で Q&A にまとめたものです。)